



赤いストー  
ル、濡れた瞳

機里

秋の紅葉は、この古知谷阿弥陀寺の見所の一つだ。僕は、ここで坊主をしている。

秋の深まってきた最近は、観光客が押し寄せて、僕は、それなりに忙しい日々を過ごしている。その女性と出会ったのは、そんな日のことだった。

うちの寺の参道入り口には、一際赤い紅葉がある。その紅葉が僕は一番好きだった。だから、毎朝、誰よりも早く起きて、その紅葉を見に行くのが僕の、秋の日課だった。

どこまでも続く鱗雲が出ていたその日は、先客がいた。長い黒髪と、肩に羽織った紅葉と同じような赤をしたストールが印象的な若い女性だった。

女性は、ガラスのような瞳で、じっと紅葉を見つめていた。いや、実際にガラスだと僕には思えた。女性の膜を張った瞳は、紅葉を映し同じ赤を宿らせていた。僕は、その姿を素直に綺麗だと思った。その後、僕の胸のどこかわからない深い部分が、ぐっと、詰まったんだ。

その時、僕はその感情の正体を理解することができなかった。

女性は、その日から毎日、現れた。それも決まって、僕よりも早くから紅葉を見ていた。そのうち、僕は、紅葉だけではなく紅葉を瞳に映す女性も含めて、一つの景色のように見るようになった。

だからだろう。僕は、一度も女性に声をかけることも、近寄ることもなかった。声をかけてしまえば、この美しい景色がなくなると、感じている自分がいた。

そして、その度に、僕の胸の奥で疼く、よく分からない感情は、手に取れるものだと間違えてしまうくらいに、強くなっていった。

僕の中で、その感情は、らみ過ぎて、いつしか、日常に支障をきたすようになっていた。それではいけないと、僕は、師である順安さんに、相談してみることにした。

「ということなのですが……」

「そうですか。それは、困りましたね。ところで、順清君は、恋をしたことはありますか？」

「え？ありませんよ。そんな邪まなこと！」

「そう、声を荒げないで下さい。それに、恋をすることが邪まなのではありません。邪まな恋をすることがいけないだけなのですよ」

「どういうことですか？」

「純粋な恋には、良い悪いはないということです。恋をする人の心が清ければ、その行いは、邪まにはなりませんよ」

僕には、よくわからなかった。ずっと禁忌だと、自分を戒めてきた僕に、その言葉も、今の自分の感情も、理解するには実感が足りなすぎた。

「わかりにくいかもしれませんがね。けれど、君の心に現れた感情です。例えそれがどんなものでも、一度は受け入れなければなりませんよ」

「そんなことを言われても……」

「君は、理性が強すぎますね。もう少し、心を解放してあげなさい。内なる自分が語る声を聞いてあげる余裕を持たなければなりませんね」

「余裕ですか」

「はい」

師は、穏やかに微笑みかけてくれる。師の言葉は、何となく理解できたが、実感するには程遠かった。

「ひとつだけ、質問があるのですが」

「どうぞ、なんでも答えてあげましょう」

「師は、恋をなさったことがあるのですか？」

「はい、昔に一度だけ……」

師の言葉は、とても静かに、しかし、力強い響きを持っていた。そして、師の瞳は、あの女性のように膜を張り、ガラスになって、僕の顔を映していた。

そこに映る僕の姿は、どこか、足が地についていないように、ふらふらとしていた。

僕は、師の言葉を理解するためには、その年の秋をまるまる使っていた。その間、僕は変わらず毎日、あの紅葉とその紅葉を見る女性を見つめていた。

紅葉は、徐々に葉を散らせていき、女性の目に映る赤も、徐々に薄くなっていった。

そして、紅葉から葉が全てなくなったその日の夜。自分の心の声を聞くことができた。それは、あまりに単純で、あまりに簡素で、邪まなものなど入りこむ余地のないものだった。

『僕は、彼女が好きだ』

次の日の朝、僕は、またあの紅葉のところへ向かった。

しかし、女性の姿はなかった。僕は知らず、自分の胸の辺りをぎゅっと掴んでいた。そこに何かがあったわけではない。けれど、そこが痛んだ気がしたのだ。

「君の恋も、散ってしまいましたか……？」

いつの間に来ていたのか、後ろから穏やかな声で、師が僕に声をかけてくれていた。

僕は、しばし、何も答えることが出来なかった。

そして、その短いような長いような時間の中、師は、僕の答えを待ち続けてくれた。

言葉のないまま僕は、歩を進めて葉のない紅葉の下に立ち、あの女性と同じように、見上げた

。

何故か、じわりと涙が瞳を覆った。零れることも、乾くこともない、絶妙な量だった。

「本当に、純粋な恋をしたのですね」

「はい」

今度は、師の言葉にすぐ応えることができた。

「もう一度聞きます。君の恋も、散ってしまいましたか？」

「いいえ……」

「そうですか」

師は、理由を問わなかった。

僕の恋は散っていない。確信はないけれど、また来年、あの女性はまたここに帰ってくると思うのだ。あのガラスの瞳を携えて。

そして、僕は、今度こそ……

赤の紅葉、赤のストール、そして、赤の瞳——

「この紅葉が好きですか？僕は、大好きなんです」

「え？」

振り向く女性の瞳は、やっぱりガラスだった。今、女性の瞳には、ガラスの瞳を携えた僕が、鮮明に映っていた。

「僕は、この紅葉が大好きなんです。」

僕は、もう一度、同じことを言う。それから、先程とは違う言葉を一つ加える。

「そして、僕はこの紅葉以上に、あなたのことが——」

とても強い風が吹いた。僕の言葉は、女性に届いたのだろうか。風は、女性の長い髪を翻し、ガラスの瞳を隠してしまい、僕は女性の反応を見ることが出来なかった。

この風が止んだ時、彼女の瞳に僕は映っているだろうか——